

エデュコ  
**Educo**

学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

No.62  
2023年

汐見 稔幸さん

巻頭インタビュー p.2  
東京大学名誉教授  
家族・保育デザイン研究所代表理事



知っておきたい教育 NOW p.4

- ① 複雑な社会問題を解決する力の源に「数学」という視点をもつ大切さ
- ② AI時代における数学の重要性と中学校数学科で目ざす「事象を数理的に捉える力」の育成

きょういく見聞録 p.8

- ① 日本語・英語両面からの「言語活用科」推進と「一生ものの学び方」指導の実践
- ② 夢を育み、未来を切り拓く人づくり  
～三重県松阪市における郷土の偉人に学ぶ教育の推進～

地球となかよしトピックス p.12

- ① アカウミガメ飼育でオンリーワンの学校へ
- ② 和を以て貴しとなす子どもたちの心に火を灯す「キャリア教育推進事業」の取組

Information 北から南から p.16

地球となかよしゼミナール p.18

【連載第3回】

『草枕』脱線雑談③

グレン・ゲールドと草枕

Front Runner p.19

子どもたちの「ワクワク！」を応援！  
～こどもエコクラブ～

ほっとな出会い p.20

認定NPO法人 全国こども食堂支援センター・  
むすびえ 理事長 東京大学 特任教授

湯浅 誠さん

# 学び上手は生き方上手 ～私が提唱する未来の学び

東京大学名誉教授 家族・保育デザイン研究所 代表理事

とし ゆき  
| 汐見 稔幸 さん

## 家族を支えた少年時代

父はもともと割烹料理屋の跡取り息子なのですが、機械の組み立てなど物作りが大好きで、家を飛び出してレコード会社の録音技師になりました。テレビ放送が始まった時は部品を買ってきて設計図だけでテレビを組み立てて、四分の一の値段で完成させてしまうような人。そんな父を見て育ったので、僕もドライバードなんでもこじ開けたり、近所の大工さんのところに出入りして仕事の様子を飽かず眺めたりしているような子になりました。

なんだって必要なら作ればいい。ちよつと考えたり工夫したりすれば大抵の物は作れる。そういうことを父から学んだ気がしますね。お風呂の水が溜まったらプザーが鳴る装置とか、個人用扇風機とか、僕自身いろんな物を作りましたよ。扇風機なんかは人気で、学校の友人からよく作ってくれと頼まれました。

母は妹の出産後に股関節が脱臼して、僕が小学校に入る頃にはほとんど歩けなくなっていました。父は東京に単身赴任をしていたので、長男の僕が自転車の後ろに母を乗せてどこにでも連れていきましたし、毎日の買い物やお墓参り、近所へのお歳暮配りなども母に代わって全部やっていました。今で言うヤングケアラーのはしりです。

母は足が不自由なものともせず、学習塾や書道塾を開いて二百人もの生徒を抱え、大人にも子どもにも教えていました。こつこつと字を書いていけばあつちでは相撲を取っているような、近所の人にとってなくてはならない居場所を作ったのです。

僕は母の背中を見ながら「お母ちゃんすごいな、負けへんなあ」と思っていました。身体にハンディがあっても、やりたいことは決してあきらめない。そういう不屈の精

神を子どもたちに見せてくれたのです。

## 自分で経験したことが血肉になる

中学に入ると友人の家の屋根裏部屋に化学の実験室を作って、二人で実験めいたことをやっていました。実験中に爆発を起こして、驚いた近所の人たちが集まってきたこともあります。僕は話を聞いて納得するタイプではなく、なんでも自分でまず体験してみないと気が済まないタイプです。

毎週ため池のプラントクソンを採取して記録を取ることもしていたのですが、わからないことがあるので学校の先生に聞きに行く、自分にもわからないからおつしやって大阪教育大学に連れていってくださいました。そこで先生の恩師である生物学の先生を紹介していただいたのです。淡水のプラントクソンはまだ説明されていないことがたくさんあるから、今度はこれについて調べてみて、とミッションを与えられて、いろんなことを教えてもらいました。

自分の経験から言えるのは、子どもが興味をもっていることを学校は「おもしろいね」と励まして学びの場をセッティングしてくれたり、詳しい人に引き合わせてくれたりして上手に手伝ってくれるところがあったら、もつといろんな人間が育っている気がします。定められた枠の中で、言いつけられたことを上手にできたかどうか試す場所になってしまっただけから、学校は小さな人間しか育たなくなってしまう気がするので。

今の子どもが先生に言われたことしか



## PROFILE

1947年大阪府生まれ。東京大学名誉教授・白梅学園大学名誉学長・全国保育士養成協議会会長・日本保育学会理事（前会長）。一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事。専門は教育学、教育人間学、保育学、育児学。自身も3人の子どもの育児を経験。保育者による本音の交流雑誌『エデュカーレ』編集長でもある。持続可能性をキーワードとする保育者のための学びの場「ぐうたら村」村長。NHK・Eテレ「すくすく子育て」など出演中。著書に『汐見先生と考える 子ども理解を深める保育のアセスメント』（中央法規出版）他多数。

やらない、できないというのが、いかにも気の毒な気がしますね。

## 保護者や地元の人実践的な授業を担当

畑に赤ちゃんたちを連れていって、土の上でハイハイさせるとどうすると思いませんか？ みんな大喜びで口の中に土を入れて、口の周りじゅう土だらけにするんですよ。土を食べなくなったら現代人くらいで、昔の人は「もし食糧がなくなったら土を食べる、そうすりゃ生きていける」と言っていました。生存に必要なミネラルは土を食べれば最低限補給されますから。そういう知恵は子どものほうが本能でよくわかっているんです。ただそれを見てお母さんがキヤーツと慌てるか、「あら、おもしろいわね」と泰然としているかによつて、子どもの一生は変わりますね。

子どもが自然と深くコミュニケーションして、五感を使って手探りしながら「これなんだらう。おもしろい物がある」と興味を示した時に、恐らくその大部分はお母さん好みでないことだと思っんです。でも子どもにとってそれが大事な興味の対象だとしたら、好きなように調べたり確かめたりさせてあげてほしい。人は自然から大きく離れてしまつたら、上手に人間になれませ

ん。

学校の先生が全部教えてやるうなんておこがましい考え方は、もう改めるべきです。ちよつと先に生まれて、少し余分に知っているだけじゃないですか。本当にその世界について深く知っているわけじゃない。今日は教科書のここからここまで教えるなんて安易な授業をしても、子どもは絶対に感動しません。

僕は小学校の授業の半分くらいは、保護者のかたがたや地域の人にやってもらうのがいいと思います。

地元の農家のかたに来てもらって、農業は今どうなっているのかお話ししてもらうとか。次はみんなで実際に畑に行つて、どうして土によって作物の大きさが違うのか話してもらおう。そういう授業だったら圧倒的におもしろくなります。なぜなら彼らはその道のプロだから。本物の文化にふれないと子どもは感動しません。

教師は教え方のプロであつて、教える内容のプロではないのです。教師には子どもがおもしろい人に出会つて、いろいろな学びをするお手伝いをやってほしい。そういう意味で教師は「教える人」であるよりも、「ファシリテーター（進行役）」であるべき。本物をもっている人、本物の文化に子どもを出会わせてあげるのが教師の役目だと思つています。



### 今の学校では天才は育たない

日本は特に秀でたところのある子を伸ばすのがすくく下手です。学習進度はクラス全員同じでなければいけないという縛りが先生がたに刷り込まれているからでしょう。

僕の息子の同学年の友だちで、小一の時に大好きな算数のドリルを家で一晩で解いた子がいました。翌日、学校にそのドリルを持っていったら、先生に怒られたそうです。これは毎日1ページずつやるものだから、全部消しゴムで消さないといふ話を聞いた時、伸びる子をつぶすのがその先生の仕事なのかなと思ひましたね。「もうできたんだ、すごいね。他のドリルを用意するよ」と大いに励ましてやればいいのか。結局、その子はのちに東大に合格するのですが、最終的にハーバード大に進みました。

今、イェナプランとかモンテッソーリとか、フランスのフレネスクールといった新しいタイプの学校が世界中で人気ですが、基本的にはみんな、具体的なカリキュラムは生徒が作ることになっています。

午前中は国や自治体がつつたカリキュラムを取り入れるとしても、午後は子どもたち一人一人が、自分が学びたいものを決めるのがいいと思います。それを地域のいろいろな人が学校に来て教えてくれる。料理をやりたい子には、水・金の午後は保護者のかたが来て料理を教えてくれるとか、将棋をやりたい子には、将棋のおじさんが来てくれるとか。算数が好きな子にはどんな難しい問題に挑戦させて、大学レベルの問題にも挑戦させるとか。そうやって自分のやりたいことを自由にカリキュラムに組んでいくことが可能なら、子どもたちにとって学校は魅力的な場所になるのではないでしょう。

僕だったらアートと生活を中心にした

カリキュラムにして、その中で一人一人何をやりたいか考えさせますね。アートと生活、これこそが最高の文化だと思つています。

卒業論文ならぬ卒業料理があつて、一人三十個得意料理を作れないと卒業できない、そんなおもしろい学校を作りたいですね。誰もが自分の土台である家庭を大事にして、アートや料理を作るのが大好きになった時、日本社会は絶対に変わりますよ。

知人に図工の先生をやっていた人がいるのですが、「今の学校の図工のやり方は、ほとんどの子は図工が嫌いになる」と言っていました。いつまでに何枚描かなきゃいけないとか、制約が多すぎる。与えられた枠内で嫌々やらされるほどつまらない授業はないと。

子どもをアート好きにするには、図工室や美術室に世界中の主だった画家の作品集をどつさり用意してやつて、最初の何か月かかけて自分の一番好きな画家を探させる。好きな画家が見つかったら、今度はその人の絵を真似して描いてみる。そうやって一年かけて、好きな画家や造形作家を探す取組を続けさせ、いいとか悪いとかの評価は決してしないこと。どんな時も「お前らしい」と励ましてやる。そうしたら子どもはアートが嫌いになるはずがない。

こうした学びを支えるには、教科書以外の教材をどれだけ豊富に用意できるかが鍵になってきます。社会科室、理科室、音楽室というように科目ごとに教室があつて、そこには図鑑や資料集、図録、漫画など個々人の学びを応援する魅力的な教材がたくさん並べられてるのが理想です。ホームルームと国語以外はそれぞれの教科の部屋に移動して授業を受ける、こうした先進的なスタイルを取り入れている学校も徐々に現れ始めています。

### 議論し、話しあう力を養う

20世紀の教育は頭の中に大量のコンテンツを詰め込んで、後でどれくらい再現できるかテストしていました。ところが今の社会は予測不能で、コンテンツそのものがどんどん変わり、教え込んだ知識が時代にあつたものではなくなつていくのです。だから、最低限の知識はしっかり理解しておくことは必要であつても、どれだけ正確にたくさん覚えたか競い合いをさせるのはもうやめたほうがいい。

社会に出たら正解がない問題のほうが多いのです。その都度適切な解をみんな考えながら作っていくしかない。コンテンツ重視の教育から、ハウツー重視の教育にシフトしていくべきです。

その丁寧な議論をする力を、赤ちゃんの頃から教育していくことが必要です。欧米ではまだベビーカーに乗っているような幼児に対しても、母親が「あなたはどう思うの？」と意見を聞いているのだから驚きます。

ある高校では一学期のあいだ、「ゼロとは何か」だけ考えさせる授業をした先生の先生がいたそうです。僕は学生の時、まさにこういう授業を受けたかった。正解を導き出すための知識を丸暗記させるような授業ではなく、みんなで解を考え出すような授業。その過程でそれぞれが自分の意見を言えるようにしていく。

正解を覚えさせるのにこだわってきたことが、今の日本の教育を苦しめている根本原因のような気がします。

教育の仕事は上手に子どもの意見を聞き出すことであり、子どもが自分なりの意見をその子らしく言えるようにしていくことです。意見が違ふ相手とでも上手に議論できるようにしていくことが、これからの時代はとりわけ重要だと思います。

# 複雑な社会問題を解決する力の源に「数学」という視点をもつ大切さ



東北大学  
理事・副学長 小谷 元子

一見して解決の糸口さえわからない場合が多い。それを、解決可能なモデル化した問題に落とし込まなくてはならない。そのためには、まず解決したい問題について多様な情報を集め、その上で共通の構造を見いだして問題を要素にブレイクダウンしていく。分けられた要素の一つ一つを解決しそれらを再び連結できれば、問題全体も解決できる。

数学を学ぶとは、このプロセスを訓練することにほかならない。数学の教科書を見ると、社会問題をなぞらえた文章題が出ている。しかし、すでに数学に落とし込まれているため、「数学の言葉に変換することが複雑な問題を解決する第一歩」だとは気付きにくい。また、日常の言葉で語られた問題を、論理的に考えたり、抽象的に捉え直したりする能力は、数学の問題を実際に解くことで養われる。数学をハックグラウンドにもつ人が世界中で活躍している理由が、ここにある。

中等教育で学ぶ三角関数やベクトルなどはごく基礎的な数学であって、現実の社会問題を解くには、基礎的な数学がどう使えるかを見極める「想像力・発想力」がさらに必要となる。しかし、野球の世界でホームランバッターになるのに長年の素振りが必要ないように、将来、複雑な問題を解くため

## ポイント

- ① 数学を通して身につく知識や技能、思考プロセスは、仕事をしたり、現代社会の複雑な問題を解決したりするために必要な能力。
- ② 数学は科学の基礎になる共通言語。抽象的で普遍的であるが故に、多様な応用や展開の可能性があり、時代の要請に応じて、今も進化を続けている。
- ③ 数学は、わくわくする発見に満ち、自由な発想をいかして誰もが活躍できる学問である。ぜひ、その魅力を教育の現場で伝えてほしい。

## 仕事や社会問題の解決に不可欠な学び

昨今、「数学を学ぶ重要性がいちだんと増している」と言われるが、現代社会において、初等・中等教育、さらには大学以降の高等教育で数学を学ぶ意義は、主に二つあると私は思っている。

一つは、数学の知識や技能を身につけるためである。デジタル・トランスフォーメーションが進み、これまでに以上に仮想空間で扱える事柄が増えた。実験や、時には直感に頼って判断していた事柄についても、まずはデジタル空間上で計算や機械学習（AI）により検討することが通常になりつつある。

その背景には、研究やものづくり、

医療の現場でより複雑な事象が扱われるようになり、今までのやり方では時間やコストがかかり過ぎるため、急速に発展する計算機・データ解析・AIなどを用い、シミュレーションという擬似的な思考実験によって、答えの有力候補を絞り込もうという事情がある。それに伴い、問題をコンピュータが理解できる言語に変換しなければならなくなった。コンピュータなどの機械の「物の考え方」は数学理論に基づいているため、機械とのコミュニケーションが増えると、数学の知識や技能が重要になる。

もう一つは、数学を学ぶ過程で「複雑に絡み合った問題を要素にほぐす力」を身につけるためである。環境問題や人口問題、食糧問題など現代社会が抱える問題はどれも非常に複雑で、

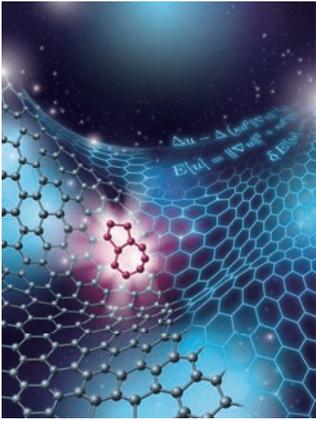
には、初等・中等教育で学ぶ基礎をおろそかにできないことも確かなことである。

また、「数学」という視点をもつことで、世の中を見る目が豊かになることも、数学を学ぶよさといえる。

## 他分野とかかわりながら発展を続ける「数学」

すべての科学技術が、抽象的で普遍的な数学によって記述されることから、「数学は科学の共通言語」と言われている。その中で、私が「材料の数学」に携わることになったのは、長年籍を置いている東北大学が、材料科学に強い大学であるという偶然によるところが大きい。私は、材料科学の優秀な研究者と交流する機会を得て、今日の材料開発が抱える課題を知った。二〇一二〜二〇一九年には、東北大学・材料科学高等研究所に所属し、最先端の材料科学について大いに議論した。

材料科学が抱える課題の一つは、一見、塊のように見える材料が、実際に



は原子や分子といったミクロな粒子の集まりでできていることに起因する。科学技術の向上により、ミクロな構造が制御可能になったため、それが材料の性質にどう影響するかが研究対象になった。

ミクロな構造は既存の数学で記述できるが、材料全体を記述するには、異なるスケールのネットワークが積み重なる階層構造を数学で表さなくてはならない。そのため新しい数学が必要になり、私が専門としている「離散幾何解析学」を使うことを考えた。

材料科学の発展に貢献できたことを嬉しく思っているが、数学者である私は、それ以上に材料科学を通して数学を深められたことに喜びを感じている。数学は、歴史のなかで宇宙や素粒子などその時代の新しい科学を記述することで発達してきた。二十一世紀の今、材料科学・生命科学・社会科学などの諸科学からだけでなく、複雑な要素が絡み合った社会課題からも、数学は発展の刺激を受ける。それに応えて、数学はますます難しい事象を扱えるようになり、そのおもしろさは尽きない。

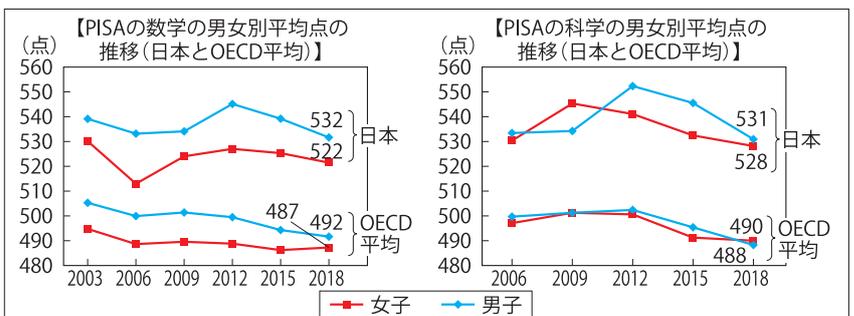
## 誰もが活躍するために

数学を好きになったのは、子どもの頃に数学の問題を解いた時の目の前が開けるスッキリ感と圧倒的な喜びを

経験したからである。中学生の頃には本を読んで、これまでモヤモヤしていた「無限」の概念を微分積分という数学によって論理的に理解した時のことは、特に初期の数学的体験として鮮明に覚えている。

見ることもふれることもできない世界でも、そこに数学的な構造を見いだせれば、本質が見え、スルスルとほぐれるように解けることを知った。私は数学に夢中になり、先生に話したり、質問したりするようになった。その先生が「すごいね！ もっと考えてみたら……」と背中を押してくれたことが、数学者としての現在につながっている。

数学を女性の苦手分野だと考える人がいるようだが、それは誤解だと思う。科学の共通言語である数学の本質は、他の言語と同様に、「記述する対象の文脈を適切に理解して表現する」ことだ。一般的に言語による表現能力が高いとされる女性が数学を苦手であるとは考えにくい。数学はすべての人が活躍できる分野である。それにもかかわらず、女性が数学に進まないのは、魅力が十分に伝わっていないからだろう。日本を含めたアジアの国々で数学や科学のリテラシーが高いにもかかわらず、学ぶことの喜びや動機が低いのは、それが社会の役に立っているのだとい



PISA (Programme for International Student Assessment) は、OECDが15歳児を対象に、主に読解、数学、科学の三分野のリテラシーについて3年ごとに実施する国際的な学習到達度調査。2022年の調査結果は2023年12月発表予定。日本の女子は世界的に見れば、数学と科学のリテラシーはとて高い。数学に対して苦手意識をもたず、この能力を社会に生かしてほしい (<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/>)。

う実感が乏しいからだとされている。

今後、社会課題の解決に数学の力は必須である。そこに新しい感性が加わることが求められている。そのためにも、先生方には数学の魅力を伝え、子どもたちの背中を押してあげてほしい。教育現場が、先生と子どもたちが向き合う余裕のある、豊かな場所になることを願っている。

# A I時代における数学の重要性と中学校数学科で目ざす「事象を数理的に捉える力」の育成



筑波大学附属中学校  
教諭 小石沢 勝之

**ポイント**

- ① 事象を数理的に捉える力の重要性がますます高まっている。
- ② 数学の学習過程は主体的な学びを誘発し、創造性を育むことができる。
- ③ 社会の諸問題を解決するために、他教科へと視野を広げ、事象を数理的に捉える力を複眼的に学ぶことも大切である。

A Iの急速かつ飛躍的な進歩に伴い、私たちは技術革新の恩恵を受けて生活している。G I G A スクール構想の整備が進み、生徒の学習に関わる教育D Xが促進されている。私たち教員は、I O Tですべての人とモノがつながり、さまざまな知識や情報が共有され、今までにない新たな価値を生み出す Society 5.0 社会を実現する生徒を育てる一端を担っている。二〇一九年に文部科学省と経済産業省から報告された「数理資本主義の時代」には、「この第四次産業革命を主導し、さらにその限界すら超えて先へと進むために、どうしても欠かすことのできない科学が、三つある。それは、第一に数学、第二に数学、そして第三に数学である！」と記されている。数学が果たす役割が社会で増大する中、中学校数

学で何を学ぶことが求められているのか、生徒たちは何を身につけることができるのかを考えてみたい。

**事象を数理的に捉えるための「数学化」**

中学校数学科では、数学的に問題解決する過程を重視した授業を行っている。その過程の中で、数学固有の事象に加え、日常生活や社会の問題を数理的に捉えることを「数学化」といい、事象の数量に着目して数学的な問題を見いだしたり、事象の特徴を捉えて数学的な表現を用いたりする力を身につけることを意図している。

例えば、富士山の頂上やタワーの展望台、気球からの景色をイ

メージしてみよう。遠くまで見渡すことができるということは、向こうからもこちらが見えることを意味するだろう。図1では「富士山が見える範囲」であり、地球を球体とする、視線（光）は直進する、頂上の場所を点Aとする、球の半径がある値で近似して考える、などが数学化に相当する。現実の世界の事象を数学の世界で考えるためには、事象の本質だけを残し、対象を単純化して考えることが欠かせない。

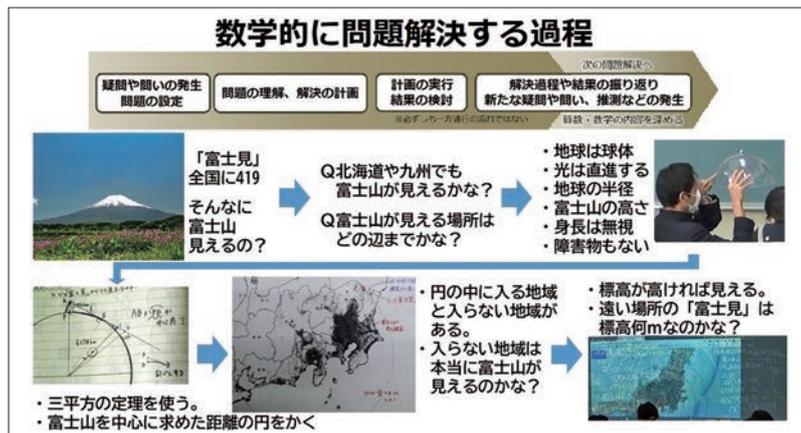


図1 三平方の定理の利用

現実の事象を、いわば「数学のレンズ」を通して見ているのである。

## 「数学のレンズ」を通して学習過程の経験は創造性を育む

VUCA時代に対応するために、新たな価値を生み出す創造力の育成が求められている。このような創造性はどうのような学びから身につくのか。

生成系A Iとともに生きる現代では、「人間ならではの強み」を意識する必要がある。すなわち、解き方が定まった問題を効率性のみを重視して解いたり、計算手続きの反復のみに留まったりする学習ではなく、自分なりに試行錯誤したり他者と協働したりしながら問題を解決するなど、主体的な学びが必要になる。

例えば、信号のないC交差点に歩行者用信号を設置する場合、青信号の時間を何秒にしたらよいかを考察する問題を考える(図2)。実際の授業では、他の交差点の動画を2つ提示しており、生徒は与えられた動画の情報から必要と思われる数量を取り出して、青信号の時間を類推する。考察対象となる交差点に信号機はないため、実際の時間を知ることができない。解決へ向かう過程では、多様な考

えが表出する。道幅、交通量、地理的要因、周辺環境などの数量に着目して問題解決の方法を探ることになる。例えば、周辺環境として、子ども連れやお年寄りが多い地域であれば、意図的に青信号の時間を長く設定したいという考えが生徒にはたらく。このような多様な考えは班活動などの他者との意見交換の中で活性化し深化する。他者



問題：C交差点に信号を設置する場合、歩行者用信号(囲んである横断歩道)の青の時間(点灯時間と点滅時間)を設定するなら、何秒にするといいでしょうか。警察の担当者になったつもりで時間を考えてみましょう。また、設定した根拠を明確にして説明してみましょう。

図2 青信号の時間問題

の意見を聞き、その意見を取り入れ自分の考えを精緻化すること、他者の試行錯誤の様子を見て、自分の考えを相手に伝えることなどは、協働的な学びの中にこそ現れる。相手の意見を聞くとき、なぜそのように考えたかを質問する。相手の「数学のレンズ」を通して事象を数理的に捉えることで、自分の考えとの異同に気づく。数学化された数量の関係が整理されると、既習の知識に基づいて解決しようとする。もつとよい解決方法はないかと考える生徒、他の交差点も同様に調べられないかと考える生徒が現れる。これらの様相は生徒が主体的に学び始める一例である。そして、生徒自ら考えた新たな問題を再び学習過程に即して解決していく。このような学習過程で創造性の基礎を育むことができる。

## 教科横断的な取り組みで視野を広げる

身近な事象を数学化することは教科横断的な内容としても考えることができる。他教科で学習した具体的な事象を数学の視点で捉え直して教材化することにより、生徒が関心を持続させながら数学的な見方・考え方をはたらかせ、自立的・協働的に問題を解決していく機会を増やすことができる。本校での事例として、数学科・保健体育科・総合的な学習の時間で扱った「ポツ

チャ」と数学科・美術科で扱った「伝統文様」について紹介する。

本校のオリンピック教育の一環として、保健体育科と総合的な学習の時間でパラスポーツである「ポツチャ」を生徒が体験する機会があった。この体験を踏まえ、数学科ではポツチャを題材として、第一学年、第二学年の統計領域に位置付け、相対度数を根拠にして不確定な事象の起こりやすさを予測する授業を実施した。相対度数を用いた判断のよさを見だし、ポツチャの戦略に数学的な考え方を生かすものである。「伝統文様」では東京五輪のエンブレムを扱った。美術科では伝統文様の種類調べとその制作、数学科では図形領域に位置付け、対称性と移動に関する題材として伝統文様の数学的な性質を見だし、帯状文様、壁紙文様の創作を行った。制作した文様について、対称性に着目し生徒自身で移動の組み合わせや分類基準を考察することで、数学的な考え方を育成するものである。教材化に当たっては、扱う学年や学ぶ内容を教科ごとに焦点化させることで、教科を超えたカリキュラム・マネジメントにも生かすことができる。またこのような学習経験は、他教科へと視野を広げることでも事象を数理的に捉える力を複眼的に学ぶことにつながり、社会の諸問題の解決へ生かすことができる。

析する練習、よく知った物語を、さまざまな登場人物の視点で捉え直す練習、メモを取りながら話を聞き再現する練習、などの授業を行っています。児童は、松戸市教育委員会が作成したワークブック（低・中・高学年用の3種類）を使用して学んでいます。

これらの授業を伴教諭がT1、学級担任がT2として行うことを通じて、授業の狙いはもちろんのこと、言語を扱う授業の有用性、テンポのよさなどの指導技術を伝える貴重な場を作ってきました。また、伴教諭が提案する、授業案やワークシートの細かな改善点をもとに、教育委員会で発信する資料を修正し、全体の質を高めるというサイクルを回しています。

## ジョリーフォニックスによる土台の上に TESOL で学ぶ「英語分野」

英語分野においては、2020年度より、全小学校の1年生から年次進行で、文字と音の関係を「ジョリーフォニックス」という教材を用いて学んでいます。ジョリーフォニックスは、視覚聴覚のみならず運動感覚等の多感覚を使って学ぶという特徴があります。

英語科の浅野幸絵教諭（松戸市立第五中学校）は、小中兼務教諭として、中学校区の二つの小学校で英語分野の授業実施と教員研修、および学級担任の支援を行ってきました。二つの小学校では、2017年から他校に先駆けて、全学年でジョリーフォニックスの指導に取り組んでいます。単語の読み書きができるようになっていく児童の様子は、指導のモチベーションにつながっています。



●ジョリーフォニックスを学ぶ小学生

英語が専門ではない小学校教員がジョリーフォニックスを指導しやすいように、と浅野教諭が作成したパワーポイントやワークシートのアイデアは、教育委員会を通じて全校に提供されています。

また、小学校でのフォニックスの学びを中学校英語でも活かせるように、浅野教諭が研究・実践した内容は、今後ジョリーフォニックスを学習した生徒が中学校に進学する際に参考にされ、小中学校一貫カリキュラムがより確固たるものとなっていく予定です。

中学校での英語分野では、TESOLによる英語教育を推進しています。松戸市独自のオーストラリア派遣制度で学んできた教員が中心となり、ジョリーフォニックスの土台の上にTESOLを通じた学びの実現に取り組んでいます。

## 卒業後も学び続けられる学習者の育成を目ざす「一生ものの学び方」指導の実践

「漢字や英単語はたくさん書けば覚えられる」「問題をたくさん解けばわかるようになる」「社会や理科は丸暗記すればいい」と思っている子どもたちは、どの学校にも一定数いるのではないのでしょうか。勉強量や暗記は大切ですが、新たな知識を既有知識と関連づけたりする、理解を伴った覚え方など心理学的に望ましいとされる学び方があります。筆者は、小中学校の先生がたに教員研修を通じて学び方指導の重要性を伝え、実践してもらい、児童生徒や教員向け意識調査の分析結果をフィードバックしながら、学校で取り入れやすい指導方法を研究しています。

例えば、算数の用語や定義とその例を、ペアに対して説明する活動を、全学年において取り組んだ小学校があります。この活動は、声に出して自分の言葉で説明することで、自分の理解状態を認識すること（メタ認知）を重視しています。

3～6学年の児童への意識調査では、「前よりも先生の話をよく聞くようになった」「勉強がわかるようになった」「自分がわかっているかわからないかに気づくようになった」「うまく説明できないときは、どう説明したらいいか調べて、わかろうとしている」などの項目で、8割以上が「そう思う」と答えており、児童の学習意欲の高まりが示されました。準備が不要で、一人1分程度で済む取り組みやすい活動であることから、教員への意識調査では、約8割が指導を継続したいと答えています。この小学校での取組を、児童が進学する中学校でも行い、小中学校9年間を通じた学び方指導を推進しています。

# きょういく 見聞録<sup>①</sup>

## 日本語・英語両面からの「言語活用科」推進と「一生ものの学び方」指導の実践

松戸市の全小中学校は、文部科学省の教育課程特例校の指定を受け、児童生徒の論理的・批判的思考力とコミュニケーション能力の育成を旨とする「言語活用科」に取り組んでいます。また、卒業後も生涯にわたって学び続けられる「自立した学習者」の育成を旨とする、「一生ものの学び方」指導の研究を進めています。

千葉県松戸市教育委員会 教育政策研究課

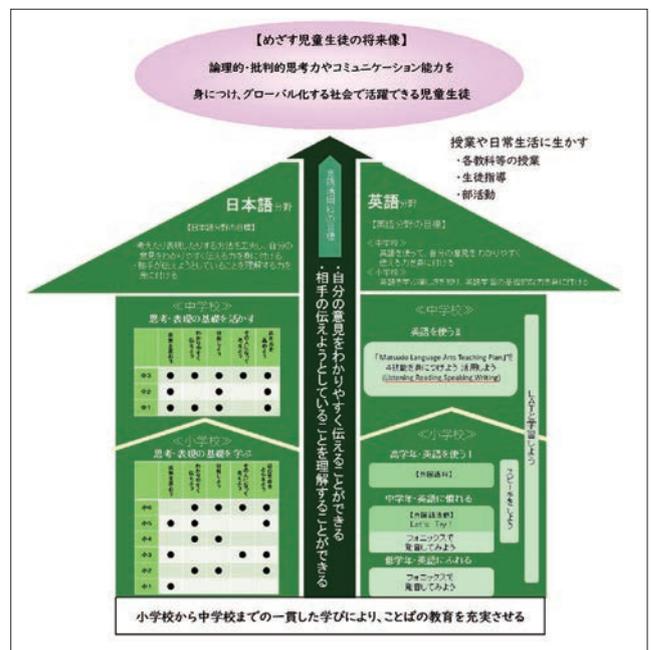
元指導主事 岡本 小枝

### 論理的・批判的思考力とコミュニケーション能力の育成を旨とする言語活用科

松戸市の全小中学校（小学校 45 校、中学校 20 校、夜間中学校 1 校）では、2011 年度から文部科学省による教育課程特例校に認定され、市独自の教科「言語活用科」を全学年において学んでいます。言語活用科は、全ての学習の基礎となる思考・表現を養う「日本語分野」と、小学 1 年生から英語の文字と音の関係を学ぶフォニックス、および中学校での TESOL（第二言語習得理論）による英語教育を行う「英語分野」とで構成されています。両言語から「自分の意見をわかりやすく伝える力」と「相手が伝えようとしていることを理解する力」を身につけることを目標としています。松戸市では、この小中学校一貫カリキュラムである言語活用科による小中連携を推進しています。

各分野における中心的存在である 2 名の中学校教員（小中兼務教諭）の、2 小 1 中の中学校区での取組を紹介します。

●言語活用科グランドデザイン



### 全ての学習の基礎となる思考・表現を養う「日本語分野」

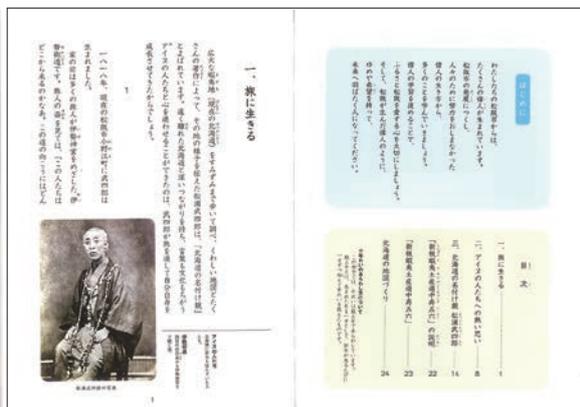
国語科の伴久仁子教諭（松戸市立第一中学校）は、中学校区の二つの小学校で日本語分野の授業を行ってきました。日本語分野では、指導内容を焦点化してトレーニングを行い、教科や領域、日常生活において、身につけたスキルを活用させていくことをねらっています。

小学校で学ぶ内容は、「意見を言おう」「わかりやすく伝えよう」「分析しよう」「その人になって考えよう」「話を再現しよう」の五つの単元で構成されています。例えば「意見を言おう」の単元では、日本語では省略しがちな主語を入れる、結論を先に話す、理由を添えるといった会話の型を練習します。複数の理由を述べるときは、わかりやすいように「一つめは」「二つめは」といったナンバリングを使います。国語の教科書に同様の内容があるものの、言語活用科では練習する題材を多く提示し、一人一人の発話場面を多く設定することでスキルとして身につけさせる点が特徴です。

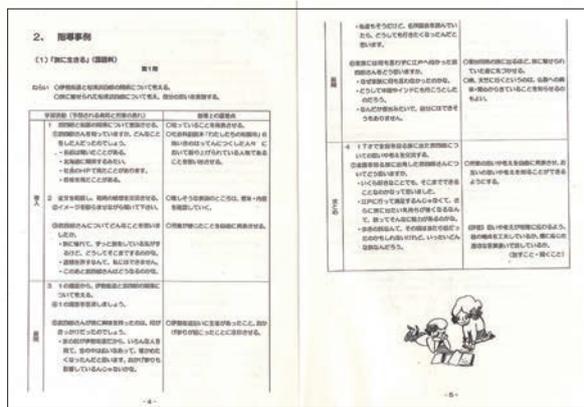
この他にも、事実と意見の区別をつける練習や、集めた情報を項目ごとに分ける練習、委員会活動について学級で 5W 1H を意識して報告する練習、マイクロディベート、絵の中に根拠を押さえて分



●言語活用科ワークブック



●松浦武四郎 副読本 1～2ページ



●松浦武四郎 副読本 指導事例

暮らすアイヌの人々と出会い、交流を深め、尊重した姿を紹介し、偏見をもたず、真実を見つめることで、言葉や文化の壁を越えて、人は理解しあえることを伝えている。また、第3章では、社会科や総合学習の時間で利用できるよう、松浦武四郎記念館を見学して主体的な学習を行う内容とした。

■松坂城を築いた蒲生氏郷に学ぶ

平成27年3月には、副読本の3冊めとして戦国武将の蒲生氏郷を取り上げ、小学6年生で学べるようにした。氏郷は、松阪に城を築き、城下町を整備し、商人の町として発展する基盤を作った人物であり、第1章では「松坂城」を築き、入城するまでの氏郷を取り上げ、どのような人物であったかを紹介している。第2章では、城下町を整備し、街道を城下に引き入れ、商人を誘致し、楽市楽座を行うなど、その後に松阪が商人の町として発展する基礎を築いたことを学べるようにした。また、第3章では、松阪を離れ、福島県の会津若松に移った晩年の氏郷を取り上げ、第4章では、茶の湯を愛し、「利休七哲」に数えられるなど、戦国武将としてだけでなく文化人としても活躍した姿を紹介している。

■豪商三井家の基礎を築いた三井高利

平成30年3月には、副読本の4冊めとして商人の「三井高利」を取り上げ、蒲生氏郷と同じく6年生で学べるようにした。第1章では、「現金掛け値なし」という革新的な商法で成功し、三井家の事業基盤を築いた高利から三井家の歴史が始まったことを紹介している。第2章では、高利に影響を与えた母の存在を取り上げ、新しい商売の方法を生み出し、行動に移した高利の姿を伝えている。第3章では、三井家だけでなく多くの松阪の商人が全国的に活躍するきっかけとなった背景を紹介している。



●副読本シリーズ ③蒲生氏郷、④三井高利

郷土の偉人に学ぶ意義

松阪市では、4年生で本居宣長、5年生で松浦武四郎、6年生で蒲生氏郷と三井高利の副読本を、全児童に1冊ずつ配布してきた（現在は印刷せずタブレットで見ることができる）。そして、国語、道徳、社会、総合的な学習の時間における学習活動を相互に関連づけ、地域の文化、歴史、産業、偉人、博物館など、身近な教育資源を積極的に活用した郷土教育を推進し、夢を育み、未来を切り拓く松阪の人づくりに取り組んでいる。

郷土の偉人に学ぶ教育を推進し、郷土を愛する心の醸成を図ることで、①子どもたちの豊かな心を育み、②地域社会の発展に貢献する意欲を喚起し、③異なる文化や歴史を理解する態度を育成し、④誇りをもって地域のことを語ることでできる人材を育て、⑤伝統文化を継承していくことにつながることを期待される。

生まれ育った郷土は、人間形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたる精神的な支え、心のよりどころとなるものであり、自分たちが育ってきた地域を大切に守っていこうとする心や、地域に貢献しようとする態度を養うことの重要性は、今後ますます高まっていくと考えられる。

発行年	人物	対象学年
2013	本居宣長（国学者）	4年
2014	松浦武四郎（探検家）	5年
2015	蒲生氏郷（戦国武将）	6年
2018	三井高利（松阪商人）	6年

●副読本『郷土の偉人を知る』シリーズ

# きょういく 見聞録<sup>2</sup>

## 夢を育み、未来を切り拓く人づくり ～三重県松阪市における 郷土の偉人に学ぶ教育の推進～

三重県松阪市では、伝統ある歴史と文化を築いてきたふるさと・松阪に誇りを持ち、松阪を愛し、優れた先人たちの生き方に学び、自らの夢を抱く子どもたちを育てるため、平成 25 (2013) 年から市内の全小学校で、副読本を活用した郷土の偉人に学ぶ教育の推進に取り組んでいる。

まつうらたけ しろう  
松浦武四郎記念館 館長 山本 命

### 若い世代の流出

三重県の中部に位置する松阪市は、人口が約 16 万人の地方都市である。近年では少子化、高齢化が進み、死亡数が出生数を上回る「自然減」が拡大するとともに、転出者が転入者を上回る「社会減」(転出超過)が続いている。この 15 年ほどで市の人口は 1 万人ほどが減少しており、社会減の原因の一つに、市の将来を担う若者たちが大学進学や就職などのために市外や県外に出て、松阪に戻ってこないことが挙げられる。

松阪市教育委員会では、平成 23 (2011) 年に「郷土の偉人に学ぶ教育推進委員会」を立ち上げ、松阪を離れても、ふるさとを誇りに思い、出会った人々にふるさとの歴史や文化を語ることができ、いつか松阪に戻ってきて貢献してもらえるような若者たちを育てるため検討を重ねた。そして、これまでは偉人を輩出した地域の小学校だけで取り組んでいた学習を、副読本を作成し、市内の全小学校で学べるようにした。筆者は、委員として副読本づくりに携わったことから、その取り組みを紹介させていただく。

#### ■国学者・本居宣長に学ぶ

松阪市教育委員会では、現在までに「郷土の偉人を知る」シリーズとして 4 冊の副読本を刊行している。平成 25 (2013) 年 2 月に刊行した 1 冊めは、松阪出身の国学者「本居宣長」を取り上げ、小学 4 年生で学習することとした。作成にあたり、専門家が書いたものでは授業で使いにくいものになることが懸念されたため、専門家の意見を聞きながら教員が各章ごとに執筆した。また、充実した実践が行えるよう教員向けに事例集を作成し、国語科、道徳科、社会科または総合的な学習の時間で参考となるよう教科ごとの学習指導案も掲載した。副読本は 3 章からなり、第 1 章では国語科で用いることを想定し、「賀茂真淵と本居宣長の出会いの感動」「志が高ければ大きな業績をなすことができること」「学問の研究は順序正しく進むこと」「宣長の人となり偉業に結びついていること」を伝える内容とした。第 2 章では道徳科で使用できるものとし「挫折を乗り越え興味のあることや得意なことを伸ばすことで大きな偉業をなしたこと」「才能や時間がないということで学ぶことをやめず、生涯を通して人や物すべてから学び続けることの大切さ」にスポットを当てた。また、第 3 章では、子どもたち自らが本居宣長記念館へ出かけて、調べ、考え、表現する主体的な学習に取り組むことを通して、学び方や調べ方を習得することができるようにした。



●副読本シリーズ①本居宣長、②松浦武四郎

#### ■探検家・松浦武四郎に学ぶ

平成 26 年 3 月に刊行した副読本シリーズの 2 冊めは、探検家の「松浦武四郎」を取り上げ、小学 5 年生で学べるようにした。武四郎は、幕末にロシア南下の危機を知り、北海道を 6 度にわたって調査し、先住のアイヌの人々を尊重し、共生を目ざした人物である。第 1 章では、若き日の旅を取り上げ、好奇心旺盛な武四郎少年が見知らぬ土地を旅し、多くの人と出会うことで見識を広め、違いを受け入れる広い心をもった大人へと成長する姿を紹介し、人との出会いや感謝を忘れなかった武四郎の心を学べるようにした。次に第 2 章では、北海道に古くから



● 受け入れ式

静岡県御前崎市

御前崎小学校 校長 田代久美子

## アカウミガメ飼育で オンリーワンの学校へ

本校が位置している御前崎の海岸には、アカウミガメが産卵のために毎年上陸してきます。そのアカウミガメを市の保護監視団体から10頭ほど譲り受け、子どもたちが学校で飼育活動を行っています。このアカウミガメの飼育活動は、46年の歴史ある活動として、親の代から子どもたちへ脈々と受け継がれ、地域に支えられながら、アカウミガメを育てるオンリーワンの学校として、伝統と誇りをもった活動となっています。

### クラブ活動の一環として 始まったアカウミガメの 飼育活動

本校のアカウミガメの飼育活動は、昭和52（1977）年、学校の観察クラブの活動の一環として始まりました。

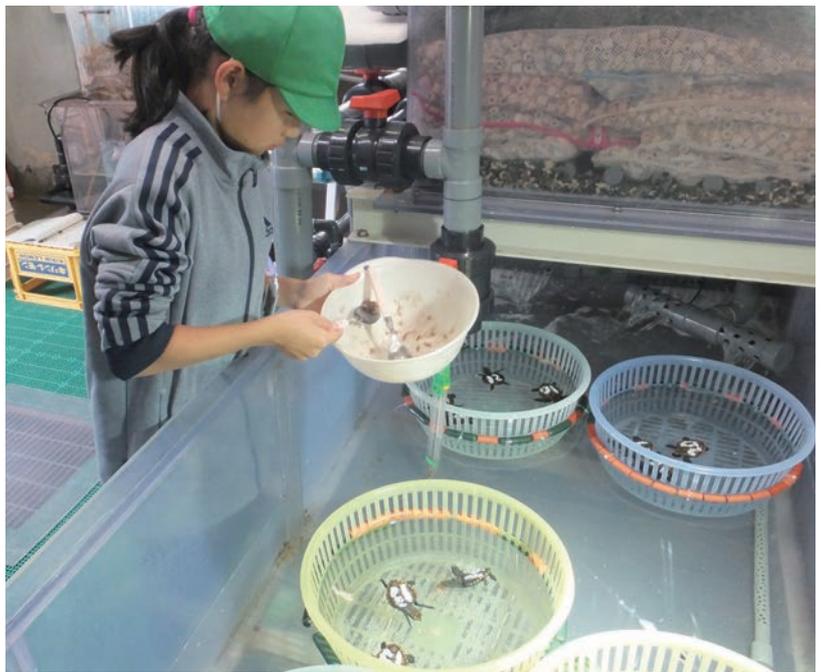
アカウミガメは国際的な絶滅危惧種に指定されており、御前崎市は、「御前崎のウミガメ及びその産卵地」として昭和55年、国の天然記念物に指定されました。またまった数のアカウミガメが産卵のため上陸する貴重な海岸は本校の学区内にあります。この飼育活動を生命の大切さを学ぶ機会に留まらず、自分や郷土を見つめ直し、自他を愛し郷土を愛する子どもたちを育てる活動に発展

させたいと考え、保護者や地域の方々の協力を得ながら取組を継続しています。

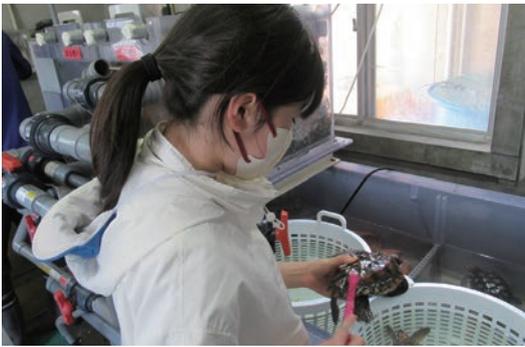
### アカウミガメの飼育を通して子どもたちが学ぶもの

毎年5年生が中心となり、一昨年の9月に孵化したアカウミガメの赤ちゃんを、6月の放流まで大切に育てます。

今年度は開校150周年ということもあり、5年生はアカウミガメを育てるオンリーワンの学校として、アカウミガメのことやそれらを取り巻く環境について学んだことを広く発信していこうと考えています。総合的な学習の時間を使って、専門家のかたから飼育の仕方を聞いて



● 飼育活動



● ついに放流



● 子どもたちに見守られ



● はらかな海へ



● 校舎のレリーフ

今年放流したアカウミガメが30年後に戻ってくる御前崎が、美しい海岸・美しい心であり続けるよう、子どもたちは今日も、未来を創る私たちにできることは何かを考え、前を向いて進んでいます。

子どもたちが進む未来には、さまざまな困難があるかもしれません。しかし、御前崎小学校で体験することの「アカウミガメの飼育」が、子どもたちに生きることの尊さを教え、人と人が支え合って生きることの大切さを実感させ、困難を乗り越えていく糧になると信じています。

**御前崎の未来を創る私たちができること**

たり、全国の関係機関の活動を調べたりしながら学びを深めています。また地域のボランティア団体の海岸清掃に参加するなど、支援して下さっている地域のかたがたとの交流を通して、郷土を愛し、共に支え合って生きていくことの大切さを学んでいます。



●以和貴まちづくり基本条例



●いわき志塾での対話の様子



●いわき志塾「イングリッシュ・イマージョン・キャンプ」

**福島県いわき市** いわき市教育委員会  
 学校教育推進室 学校教育課 指導主事 徳永 ひとむ 一夢

## 和を以って貴しとなす 子どもたちの心に火を灯す 「キャリア教育推進事業」の取組

東日本大震災後、教育をめぐる環境も変化し、さまざまな対応が本市においても求められています。あらゆるものの変化の速度が速く、複雑であり、将来を予測することが困難な今、すべての人々が、豊かな人生を生き抜く力を身につけていくとともに、時代を超えても変わらない価値を引き継いでいくことが重要であり、改めて、教育の果たす役割の大きさを痛感しているところです。

### いわき 以和貴

本市では、「以和貴まちづくり基本条例」を根底に据え、普遍的な「まちづくりの理念」として位置づけ、子どもたちも含め誰もが「住んでよかった」「住み続けたい」と思える魅力にあふれた「まち」を目ざしています。

### 志

東日本大震災から12年が経過した今、災害の教訓を風化させることなく、次代を担う「人財」を育成することが重要であると考えています。市教育委員会では、「キャリア教育推進事業」を展開しています。内容は多岐にわたり、「生徒会サミッ

ト全体ミーティング」「いわき志塾」「長崎派遣事業」「体験型経済教育」などがあります。

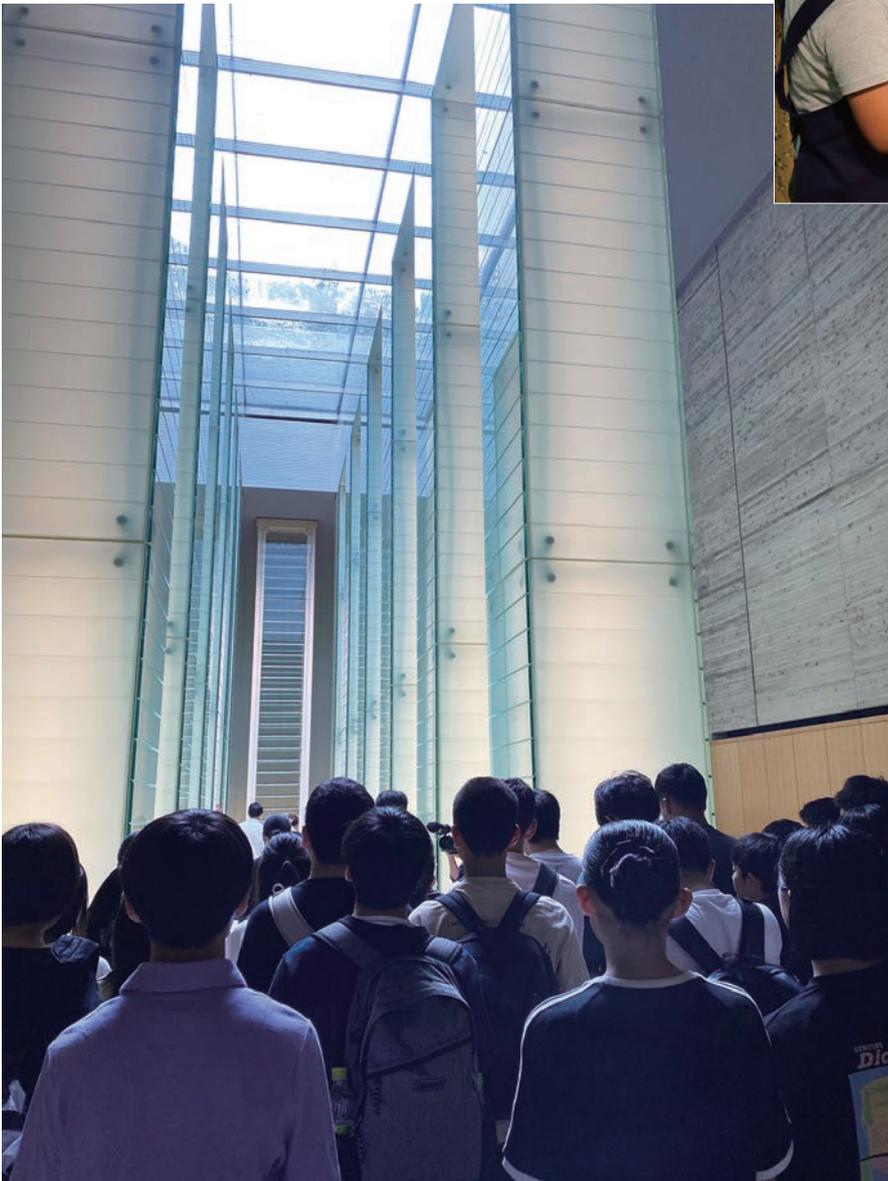
「いわき志塾」では、本市の小・中学生を対象に、NPOや企業等との連携を図りながら、子どもたちのキャリア発達を促すさまざまなワークショップを実施しています。地元で活躍するかがたを交えてのSDGsに関する提案や、いわきの魅力を再発見・発信するCMづくり、英語を用いて他者と交流する楽しさや喜びを味わうワークショップなど、グローバル・マインドや実践的なコミュニケーション能力を育成するための学びをつくり出すことに注力しています。近年では、参加した児童生徒を遠隔地の講師のかたが



●長崎市・いわき市生徒会リーダー交流会



●体験型経済教育施設での活動の様子



●長崎原爆死没者追悼平和祈念館での黙とう

たとオンラインでつなぐ取組も行っていきます。地域の復興やまちづくりに貢献するかたがたや、本市出身の国連職員のかたなどの地域の「人財」と出会う場をつくっています。

## 共創

いわきの次代を担う子どもたちには、「知識・技能」などの量的に測定できる能力（認知能力）とともに、

自己有用感や規範意識等（非認知能力）をどちらも大切にする教育を「いわき型全人的教育」とし、学校・行政・地域が主体的かつ一体となった「人づくり」を推進することが、「**以和貴**まちづくり」「**共創**のまちづくり」の礎になると信じて取り組んでいるところです。

北海道

## ふるさと教育の充実 日本遺産「炭鉄港」

美唄市立美唄中学校 教頭 鹿糠 昌弘

美唄市には豊かな自然、特色ある食文化、日本一の直線道路（囚人道路）、色濃く残る開拓の足跡、そして旧産炭地として栄えた歴史を物語る数多くの産業遺産が存在します。本校ではその恵まれた地域素材を有効に活用し、「ふるさと教育」の充実を図っています。

特に令和元年、日本遺産に登録された「本邦国策を北海道に親よ～北の産業革命『炭鉄港』」近代北海道を築く基となった三都（空知・室蘭・小樽）を石炭・鉄鋼・港湾・鉄道というテーマで結ぶことにより、人と知識の新たな動きを作り出そうとする取組が「炭鉄港」です。産業革命から高度経済成長へと栄華を極めた空知。しかし、エネルギー革命を機に相次いだ閉山で地域経済に大きな影響をもたらし、さらに炭鉱労働に関わる悲惨な事故や過酷な労働問題等により「炭鉱遺産」は、とかく負の遺産としてのイメージがつきまわってしまいました。そんな中「マイナスイメージをプラスに変える」発想の転換や考え方を大切にし、『炭鉄港』という学習材を通して地域がたどってきた歴史や他地域とのつながりについて多面的に捉えることが重要であると考えました。ふるさとのことを深く学び、よさを知ることで郷土に対する愛着と誇りをもつことは子どもたちにとってとても有益であると考えます。また、単発で終わることなく次世代へつないでいくことも極めて重要です。

少子高齢化が急激に進む昨今。身近にある地域素材を活用することで、子どもたちが社会的な事をまさしく「自分事」として捉え、社会に対する「見方・考え方」を広げていく意味でも「ふるさと教育」の推進は大変意義深いことだと自負しています。今後も地域への愛着と誇りを高め、未来に向けて自分たちが果たすべき役割は何か？ 主権者としての自覚をもち、予想不能な困難に対しても多角的に考察していく力を高めてほしいと願っています。



全国各地のさまざまな取組を紹介します。

全国

## みどりの食料システム戦略 ～生命を支える「食」と安心して暮らせる「環境」を将来世代へ繋ぐ～

農林水産省 大臣官房  
みどりの食料システム戦略グループ 中山 博貴

日本の食料・農林水産業は、大規模自然災害や地球温暖化、生産者の減少・高齢化による生産基盤の脆弱化など、さまざまな政策課題に直面しており、将来にわたって食料の安定供給を図るためには、これらを見据えた施策を展開する必要があります。

農林水産省では、これらの課題に的確に対応し、持続可能な食料システムを構築するため、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する「みどりの食料システム戦略」を2021年5月に策定し、調達、生産、加工・流通、消費のライフサイクルの各段階における持続可能な取組を推進しています。

同戦略では、2050年に目指す姿として、農林水産業のCO<sub>2</sub>ゼロエミッション化や化学肥料・化学農薬の低減などを目標として掲げていますが、これらの目標を達成するためには、生産者のみならず、流通・加工・消費まで含めた食料システム全体で取り組むことが不可欠です。このため、同戦略に基づき、生産者の環境負荷低減の努力を「見える化」する実証事業を行っています。

この事業は、コメや野菜、果樹などの農産物について、その生産段階における温室効果ガスの削減量を算定し、削減割合に応じた星のマークのラベル（下図参照）を付けて販売することにより、環境負荷低減に取り組む生産者の努力を知ってもらい、環境に配慮した商品を選ぶための参考としていただくものです。

先生がたにおかれましては、学校の授業などでSDGsや環境問題を取り扱う際、地球規模の大きな問題として説明いただくことも多いと思いますが、将来を担う子どもたちに、普段の買い物や毎日の食事などの身近な行動の中で環境問題に関心をもってもらうきっかけとしても、この「見える化」についてお話いただけますと幸いです。



「見つけて！温室効果ガス削減の「見える化」ラベル」のページはこちら



## 宮崎

### 探究的・教科横断的な学びの推進 ～総合的な学習の時間を核とした 「未来の教室」の創造～

宮崎市立住吉南小学校 校長 島木 良浩

本校は、宮崎市教育委員会指定「STEAM 教育実践モデル校」として、総合的な学習の時間を核とした探究的な学びの在り方や教科横断的な学びの推進に向けた実践を行っています。

具体的には、「主体的に課題解決に取り組み、他者と協働しながら未来を切り拓く児童を育成するために、STEAM 教育を意識した住吉南小学校ならではの“未来の教室”の実現を目指す」というねらいのもと、各学年が「伝統文化」（3年）、「福祉・防災」（4年）、「食」（5年）、「史跡の活用」（6年）をテーマに活動しています。

これらのテーマはすべて、地域が抱えている課題でもあり、自分たちの生活に身近な話題をテーマにすることで、児童が地域のためにできることを考え、地域を守っていくという当事者意識を育むこともねらいとしています。

ここで、第4学年の事例を紹介します。社会科「防災から身を守る」という単元の学習を踏まえ、教科書の資料、児童が居住する地域のハザードマップなどのデータを根拠に比較し、災害が発生した際の安全確保について課題意識をもたせます。さらに、課題解決のために、プログラミング教材「MESH」を活用し、避難所の備蓄状況の確認や、目の不自由な人への危険の周知方法等のプログラムをグループで作成します。このような学びの過程で、協働的に解決を図る児童の姿や、理科の単元「電気の働き」の学びを生かした教科横断的な学びを展開する児童の姿が確認できました。

他教科との関連を図った「習得」と「探究」のサイクルをうまく循環させ、児童の「わくわく」を大切にしながら、テクノロジーを活用することで、探究的な学びを促進できるのではないかと手応えを感じています。

加えて、児童の探究的な学びを保障する指導者の支援（コーチングなど）についても今後、追究していきたいと考えています。



## 京都

### 伝統文化「いけばな」の 歴史を学ぶ

いけばな資料館 主任研究員 細川 武稔

当館は昭和52年（1977）、華道家元池坊のビルの完成にともなって開館した、世界で唯一のいけばな専門の資料館です。実作が並ぶいけばな展以外にも人々が「いけばな」とふれ合う機会を作りたいという、当代家元・池坊専永の意向に基づき、数百年に及ぶいけばなの歴史に関する資料が常時展示されています。

ビル内には、池坊の最高教育機関である池坊中央研修学院が開設されており、国内外から通う門弟がいけばなの実技を学びながら、歴史についても知見を深めることができます。もちろん、一般の見学も受け入れています（予約制）。中学校や高校の部活動でいけばなをしている生徒や、大学等における伝統文化に関する授業の受講生などが、団体で見学に訪れることも多くなっています。また、近年は、日本文化に興味をもつ外国人の来館が、増加傾向にあります。

収蔵品は、池坊を中心とするいけばなの伝書や絵図、歴代家元の肖像画、門弟の記録、花器や道具類など、多岐にわたります。国の重要文化財に指定されている「池坊専好立花図（立花之次第九拾三瓶有）」は、江戸時代前期（17世紀）、後水尾天皇に重用されて活躍した池坊専好（二代）の作品を収録したもので、立花とは大自然の姿を器の上に再構成する複雑な様式です。池坊のいけばなには立花のほか、数少ない枝で植物の命を表現する生花、約束事のない自由花という様式があります。

池坊が代々住職を務めている六角堂（頂法寺）に關係する資料を多く所蔵しているのも、当館の特徴です。六角堂は、聖徳太子創建という古い由緒をもちます。また、ビル建設時の出土品の数々からも、長い歴史を感じることが出来ます。京都の中心に位置する六角堂から、いけばなの文化を今後も発信していきたいと考えています。



QRコードから、いけばな資料館のホームページをご覧ください。





# 『草枕』脱線雑談③ 世界的ピアニスト、 グレン・グールドと草枕

【連載第3回】（全3回）

洋画家 寺久保文宣<sup>ふみのり</sup>

グレン・グールドは世界的ピアニストとして知られていますが、32歳でコンサート活動を拒否、レコードに発表を限定しスタジオに引きこもり、自分の気に入るまでそして一人一人に語り掛けるような演奏を目ざしました。そのグールドは『草枕』を座右の書とし、50歳で没する彼の死の床の枕元には、聖書と共におびただしい書き込みがされた『草枕』があったとのこと。もちろんこの『草枕』は英訳にて、「旅」の枕詞である「草枕」の語は外国人には伝わらないので、「The free cornered world (三角なる世界)」の題名で出版されていきました。これは「して見ると四角な世界から常識と名のつく一角を磨滅して、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよかろう」という本文の一節からとられたらしいとのこと。グールドは、独特な演奏以外にも癖や奇行も有名で、天才奇人変人の誉も高い「三角なる世界」の住人でした。

グールドは「対位法」を駆使し集大成させたバッハの鍵盤曲を中心とした演奏録音を膨大に残しました。「対位法」は聖歌や讚美歌により発展し、古くはピュタゴラスの音楽理論にまで遡れる作曲術にて、西洋音楽の根本です。ベートーベンは首都ウィーンがナポレオンの軍隊に包囲された時に「僕が対位法と同じくらい軍事学に精通していたら、あんなやつら簡単に蹴散らしてやるのに！」と地団太を踏んだそうです。この「対位法」に古くて新しい命を与えたグールドの演奏を、私は「シャープでキレキレとなったセザンヌ絵画」という想像不可能な例えで表したく思います。セザンヌのように堅牢厳格な構造そのものが、歌って踊るのです。また別に、バッハの時代は王侯貴族や教会が音楽家のパトロンでしたが、市民革命により大衆の時代に入ると、モーツァルトは興行で、ベートーベンは楽譜の販売で、さらにリヒャルト・シュトラウスは「著作権」という音楽家の新しい稼ぎ出し方を発明しました。リヒャルト・シュトラウスは革新的な音楽で世に出ましたが、やがてモーツァルトに回帰するかのような音楽を現し、最後の古典的作曲家とも言われました。そしてグールドは、自分が理想とする音楽家の一人として、このリヒャルト・シュトラウスを挙げています。グールドは彼をして「時代に属することなく時代を豊かにし、いかなる世代にも属することなく、あらゆる世代の代弁をした」と評しました。

さて、彼のこのシュトラウスへの評そのままに、清教徒として音楽に対峙することを信念としたグールドにとって、聖書と共に『草枕』の教えもまた彼の人生と芸術に大きな示唆を与え続けたようです。近現代文明批判と人類普遍の真理を共に説いた世界の『草枕』かな。「住みにくき世から、住みにくき煩い（わづらひ）を引き抜いて、ありがたい世界をまのあたりに写すのが詩である、画である、あるは音楽と彫刻である。」との『草枕』冒頭の一節を引いて、点を繋ぎ線で粗く編んだ3回の拙文連載を結びます。



▲グレン・グールド (1932～1982年)  
カナダのピアニスト・作曲家  
写真：アフロ

寺久保文宣 (Terakubo Fuminori)  
白日会会員・常任委員、日展特別会員。1964年埼玉県生まれ。1990年、東京藝術大学大学院修了。2001年、日展特選受賞(01,05)埼玉県展知事受賞。2003年に個展を開催(日本橋三越本店)(06,10,14,20)。2019年、白日会第九十五回記念展にて内閣総理大臣賞受賞。その他、個展・グループ展多数。

## 子どもたちの「ワクワク！」を応援！～こどもエコクラブ～



公益財団法人 日本環境協会  
教育事業部

あずま しょうこ  
東 尚子

「こどもエコクラブ」は、3歳児から高校生まで、子どもなら誰でも参加できる環境活動のクラブです。1995年にスタートして2023年で28周年、これまでに延べ290万人の子どもたちがクラブに登録して、地域の中で自主的に環境活動に取り組んできました。

こどもエコクラブの大きな特徴は「子どもたちの自主性の尊重」です。子どもが何かやってみようかなと思ったらいつでも登録でき、活動内容も子どもたちの興味関心に応じて自由に決めてもらいます。「地域の環境で気になることは何だろう？」「自分たちに何ができるかな？」と、みんなで考えたり話し合ったりすることを大切な最初の一步とし、子どもたち自身で決めた活動にみんなで行き渡ります。



「地球にイイコト」なら、誰とやってもよい・何をやってもよいというのが、こどもエコクラブのスタンス。私たち全国事務局は地方自治体や企業・団体と連携しながら、家族、近所のお友達、児童館、学校のクラス等とさまざまな形態のクラブの、ごみ拾い、自然観察や生き物調査等の多岐にわたる活動を温かく見守りサポートしています。

こどもエコクラブのもう一つの特徴は、活動の振り返りと継続です。自治体や企業が主催する環境イベントなどに一度だけ参加して「楽しかったね！」で終わりではなく、イベントや活動での体験を通して何がわかったか、どう感じ

たかを活動レポート等で振り返ってもらい、それに対して専門家の先生がメッセージやアドバイスを返して「次はこんなことをしてみよう！」という次のステップにつなげられるような仕組みを設けています。子どもたちは、自分たちの活動を誰かが見てくれている、応援してくれていると感じることで得る承認感や達成感に加え、振り返りにより今後の課題や疑問を発見して継続的な活動への意欲を高めています。

とあるクラブの活動発表の場で、大人からちょっと難しい質問が出たことがあります。こんな質問に子どもが答えられるのか？ とその場にいた誰もがドキドキしていたところ、その子は「合っているかどうかわからないけれど、自分はこう思います」と回答したのです。正しい知識を身につけることももちろん大事ですが、自分の思っていることを、自分の言葉で、大勢の前でしっかり発言できる力が子どもたちに身につけていることを実感した出来事でした。PDCAという言葉は知らなくても、継続した活動をする中で、子どもたちは自然に、自ら考え、学び、対話し、行動する力を身につけているのです。



好きな仲間と好きなことに取り組む「ワクワク！」、自然や生き物とふれ合うことで感じる「ワクワク！」、疑問や課題を発見する知的好奇心の「ワクワク！」、活動内容や自分たちにできることがステップアップしていく「ワクワク！」。子どもたちのたくさんの「ワクワク！」を応援し、さらには環境保全やSDGsの達成にも貢献しているこどもエコクラブ。皆さんも参加してみませんか。

# 地域のつながりを深め、居場所を提供する子ども食堂

ほ・っ・と・な・出・会・い

認定 NPO 法人 全国子ども食堂支援センター・むすびえ 理事長 東京大学 特任教授

湯浅 誠さん



交通安全の見守りくらいに、子ども食堂はあつて当たり前のようにしたい。子どもが「行きたい」と思ったとき、気軽に

## 子どもだけでなく誰もが行ける場所

子ども食堂は経済的に困窮している子どもが行くところだと思われているかたが多いのですが、全国に7000カ所以上ある子ども食堂の8割は「どなたでもどうぞ」と地域のみなさんを歓迎しており、多世代交流の場として機能しています。地域の人が誘いあつて行くという点で、昔の自治体の子ども会を想像していただくといいかもれません。

公園に行くとき、自分はそのこにふさわしいか躊躇する人はいないですね。公園は困っている人が行く場所だとラベリングされてないし、入り口で年齢や国籍を聞かれるわけでもない、所得制限もない。一人で行っても変に思われない。

子ども食堂も公園みたいに、「青信号の顔をして行けるから、黄信号の子も行ける」場所なのです。どんな人でも歓迎する場所だからこそ、貧困の子と接点をもてる強みがある。子ども食堂でよくあるのが、ニカッと笑った子の口を見ると歯がなくて、治療が放置されている子だったとか、楽しそうに遊んでいるけれど、毎回「家に帰りたくない」とぐずるので、何か事情がある子だと支援者が気づくとか。子どもとの会話の中で、その子がお手伝いの度を超えたヤングケアラードとわかつた例もあります。

行けるような社会環境を作るのが私たちの目標です。

## 家庭科室を子ども食堂に使わせてほしい

いま、家庭科室を地域に開放してくれないか、各学校に呼びかけています。場所さえ使わせてくれれば、子ども食堂をやりたい人はいくらでもいるので、そこで朝食を提供できます。学校の家庭科室なら、登校中に通学路を外れる必要もないし、食べたあとそのまま教室に行けるので、安全面から言っても一番望ましい。

実際にやったところは例外なく、遅刻や午前中の居眠りが減ったというよい効果がたくさん出ているのですが、何かあったら学校の責任になるという懸念があるのか、あれだけの場所がありながらなかなか進まないのが現状です。

煮炊きが心配ならバナナと牛乳だけを出すのでもいいし、前もって作っておいたおにぎりを出すだけの子ども食堂もあります。なので、そんなに心配しなくてもいいのですが、やはり勇気がいるのでしょうか。

部活動の外部委託のように、学校も徐々に外の機関に開放していったほうがいいのですが、その切り替えがまだうまくいっていないと思います。

## 愛着のある居場所

学校に行けなくても子ども食堂には来ているという子はたくさんいます。ある引きこもりの子は、学校から作文の課題が届けられたとき、子ども食堂のことを書いて、それをクラスで発表するときだけ、教室に入れたそうです。また、インドネシア国籍の子で、学校では恥ずかしいから日本名を使っていた子がいました。その子のお母さんが子ども食堂でインドネシア料理を振る舞った日、お母さん

がスターになったのを見て自国に自信をもち、以来、その子は学校でも本名のインドネシア名を名乗るようになったそうです。また、病気で亡くなった小学2年生の子がいたので、子ども食堂でやっていた駄菓子屋が大好きだったので、お葬式では駄菓子屋をやつてほしいと亡くなった子の母親に頼まれて、駄菓子屋をやつたそうです。

学校や家以外に居場所の数が多く、子どもの自己肯定感が高くなるという報告がありますが、いまや子ども食堂はそこに集う子たちにとって、大切な居場所になっていると感じます。

## 気軽に行的てみて

手作りの場所がよくそうであるように、子ども食堂は初めて来た人にも「手があいてるなら机運んで」と頼んだりして、誰がボランティアで誰が食べに来た人がよくわからないところが多いのですが、そこがいいと思っています。こちら側は作る人、あちら側は食べる人、と役割が固定化されると、食べに来た人は「お客さん」になってしまいますから。

ぜひ、お近くの子ども食堂に一度行ってみて、食事してほしいです。周囲の様子を見て、配膳する人が足りないようなら配膳するみたいな感じで関わってみると、すんなり溶け込めると思いますよ。

湯浅 誠(ゆあさ まこと)

1969年東京都生まれ。東京大学法学部卒。1990年代よりホームレス支援・生活困窮者支援に従事。内閣府参事、内閣官房社会的包摂推進室長、震災ボランティア連携室長などを歴任。2018年、全国子ども食堂を支援するための民間団体「全国子ども食堂支援センター・むすびえ」を設立。著書に「つながり続ける子ども食堂」(中央公論新社)他多数。東京大学先端科学技術研究センター 特任教授。

## Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆巻頭インタビューの出口治明氏の言葉には、私自身、反省するばかりである。これからは改めて自分の教育観を振り返ってみたい。(山口県 T.T)
- ◆きょういく見聞録は執筆者が日本経済新聞社の中丸氏であったので、教員を外からの視線でとらえているのが大変参考になった。(大阪府 N.N)
- ◆教育 NOW 等で、タブレット活用授業等の紙上実況を取り上げて頂きたいと思います。OBとしては、今、学校がどんなに変わりつつあるか、どんな風にすれば今の学校の支援となるか……等々考える悩ましい毎日です。(高知県 E.M)

## 学びのチカラで 人と社会を 未来へつなぐ

教育出版は、無限の可能性を秘めた「学びのチカラ」を教科書という形で世に送り出し、子どもたちの成長に貢献してきました。これからは学びの「場と機会」を、家庭へ、地域へさらに社会へと広げていきます。学びのチカラで「自ら問い、考え続け、行動し、社会を創っていく人」の成長を支えながら未来へとつないでいく。そのような次代の教育をリードする企業でありたいと考えます。

教育出版

教育出版は持続可能な開発目標 (SDGs) を支援しています